

一番茶句会報

2018
— 平成三十年
— 月 号
— 号
(588)

大会記

多々良和世

伊吹嶺静岡支部 「一番茶」 新年俳句大会

於 クーポール会館



集合写真

平成三十年一月十四日(日)午後一時よりクーポール会館に於いて新年俳句大会が開催された。快晴の穏やかな日和となった。出席は三十六名、不在投句は六名であった。

第一部の司会は花村富美子さん。支部長の磯田なつえさんは、顧問になられた栗田先生に引き続きご指導をいただけることを感謝、来年は一番茶句会が五十周年を迎える。皆でどんなお祝いをするか考えて行こうと話された。

栗田先生は午前中吟行された水見色について、富谷春雷氏の句碑開き以来であり、椿の木が大きくなっていたと懐かしがられた。主宰を交代し、反応はさまざまであったが、俳句はみんなのものであり、「風」の精神を引き継いだ伊吹嶺の俳句を永遠に繋げていかなければと考えていると話された。

続いて「推敲」について語られた。自分の句は、客観的に見られないから自選は難しい。その為には推敲が大事である。綾子先生の天然の風吹きあたりかきつばた」の原句は「天然の風吹き過ぎるかきつばた」であった。原句の「吹き過ぎる」はその場の実景であり、「吹きあたり」は感動の象徴である。ああという感動が詩であると話された。もう一例、炎天に立つ牛の句について、炎天に牛が立ちゐて哀れなり↓だるさうに牛が立ちゐる炎暑かな↓だるさうに牛が塩舐む炎暑かな↓孕み牛塩舐めてゐる炎暑かな、と推敲の順を追って具体的に話された。どうしたらうまくなるか？たくさん作るしかない。年齢など考えずにやるしかない。旅へ出るのもたまにはいいが、身近で日記代わりに作るのが一番と締められた。

第二部は句会で二十分の休憩時間に事前投句の中から当日選を行った。披講は谷津政子さんと新川晴美さん。栗田先生の特選は菊山静枝さんで、先生から色紙が贈られた。各同人からも特選句には選

評と染筆が贈られ、栗田先生から入選の一句一句についての選評があった。

第三部の懇親会は多々良和世の進行。栗田先生の挨拶の後、大石久雄さんの音頭で乾杯、自由懇談による親交を主に、栗田先生は各テーブルを回られ、気軽に話しかけてくださり、笑いも起きていた。

主宰として長い間のご指導に対する感謝と今後変わらないご指導をお願いするとの支部長の挨拶に続き、佐藤博子さんより花束が贈られた。新同人の花村富美子さんには坂本操子同人よりお祝いの言葉が贈られ多々良和世が花束を贈った。卒寿祝の大石久雄さんには大森弘子さんより私も卒寿まで頑張りたいとの言葉があり、漆畑一枝さんから花束が贈られた。大石久雄さんからは卒寿の秘訣の内緒話があり、会場に華やかな明るいムードが漂った。次いで新会員五名の紹介があり、次回当番の樟ヶ谷句会とかがなる一旬会へ引き継ぎを行った。多々良和世の閉会の辞で大会は滞りなく終了した。

栗田やすし選 ◎印特選

恙なく独りの暮し干菜汁 菊山 静枝
大富士に三重の笠雲大根引 漆畑 一枝
どの道も岬へ続く野水仙 山本 法子
残照の富士を背に茅刈れり 藤田 幸子
夫逝きてひとりぼっちの日向ぼこ 辻 桂子
産み月の子の足軽し初詣 佐藤 博子
おでん鍋抱へ子を訪ふ日曜日 池村 明子
病棟にタクト振る医師クリスマス 神尾 知代
福寿草母に似てくる笑ひ皺 多々良和世
◎裏山に竹切る音や十二月 菊山 静枝

磯田なつえ選

◎三角の折鶴の顔淑気かな

渡辺 公美

松本 恵子選

◎春を待つ夫の点滴リズムよし
中村 たか選

神尾 知代

◎福寿草母に似てくる笑ひ皺
坂本 操子選

多々良和世

◎夢語る青年二人星月夜
山本 法子選

佐藤 ハル

◎福寿草母に似てくる笑ひ皺
花村富美子選

多々良和世

◎鮫鱈鍋壁に大きな大漁旗

栗田やすし



・私の好きな句・十一月号より・

寝ころべる夫へ障子の日の温み
早立ちのバスや初冬の町灯り
ブナ林の蛇行の道や片しぐれ
目を細め髪梳く老婆小春かな
軒下や等間隔のつるし柿

前田 恭子

花村すま子
松本 恵子
渡辺 健司
中村いく代
斉藤真理子

もちの実句会

No. 551

H
・30
・1
・20

磯田 秀治

小晦日研屋の声のよく通り
小流の底の小石へ初日差
海からの風に大揺れ水仙花
山晴や五体投げ出す雪の上

伊坂 壽子

外灯に煌めく路面今朝の霜
金色に雲縁取りて初日の出
初夢や人に話せぬ事ばかり

塩瀬 初子

探梅やぼつくり寺にちよいと寄り
初凧や空で暴れる武蔵坊
乾きたる切干甘くほの辛し

山本 法子

芋を焼く塩煮る窯の焚口に
本日で終はるりハビリ冬木の芽
寒晴や青く尖りし波勝崎

磯田 なつえ

由比宿や軒場に蜜柑袋売り
雲置かぬ伊豆の山山寒日和

由本法子報

瀬名笹百合句会

No. 418

H
・30
・1
・15

大石ひさを

年新た七福神をひとまはり
只管に生きゆくのみ去年今年
新年を迎へし孫の大人顔

漆畑 一枝

誕生日ひとりワインと蕪鮓
裸木に透け大富士の夕映ゆる
大皿にタグ付けられてずわい蟹

大森 弘子

水のなき河原を歩く七日かな
木に残る蜜柑を口に山下る
冬薔薇卒寿の友へ贈る宴

前田 一三

小春日や山家の爺の塀直し
新雪や富士の裾野に広がれり
落葉散る露天湯寂し我一人

片井 克子

穏やかに西日を抱く冬の海
孫に手をひかれ石段初詣
屈託も焦りもしばし日向ぼこ

松本 恵子

信濃より満月見よと初電話
寒梅の白一枝を手土産に
飛行機の音なく進む寒の晴

松本恵子報

安西句会

No. 341

H
・30
・1
・7

橋本 紀子

のびやかな西行の筆銀屏風
小面に見つめられたる冬座敷
粗刺しの布巾を縫へり日向ぼこ
餅花やコーヒー香るカウンター

松永 和子

俎始エプロンの紐きゆつと締む
あれこれと面相選ぶ福だるま
街路樹の枝払はれて冬構

吉田 明美

天心にスーパームーンの二日かな
ジェット機の機体を染めて初茜
茅葺の軒に広げて干大根

渡辺 健司

七草の粥を啜りて母想ふ
富士に向き背筋伸せりお元日
笑初嬰抱かれて泣き相撲

菊山 静枝

コーヒーを淹れて独りの松の内
筆の穂を整へてをり初硯

傷癒えし夫の鼻歌柚子風呂に
杣道の脇に積まるるくぬぎ櫛
冬耕の鋤に休めり夕日影
玉砂利の湿りを踏みて除夜詣
一品を姉妹持ち寄る小正月
菩提寺に旧友と逢ふ年の暮
歌声にキャンドル揺るるクリスマス
色褪せし夫の写真や年流る
当直の娘のメーブル年の夜
古里の海おだやかや初日の出
形見なる雨畑硯筆初
寡婦姉妹大つごもりを語り合ふ

佐藤 博子

立川まさ子

辻 桂子

坂本 操子

佐藤博子報

はとり句会

No. 320

H・30・1・12

谷津 政子

藤田 幸子

多々良和世

神尾 知代

新川 晴美

細き雨年越そばへ長き列
冬柏一人住まひの百姓家
眼の手術決めかぬる友年詰まる
里芋をとろりと煮るや母ゆづり
灯台へ荒ぶる風や冬茜
みかん櫓くべて豆煮る寒の庭
笹子鳴く小流れに日のあたりたり
除夜の湯にハーブの香り溢れさす
初手水掬ふ柄杓の竹青し
初詣看取り帰りの普段着で
黒焦げの橙刺せり細竹へ
松過ぎの寺へかけ声老庭師
澄み渡るまんまるの月去年今年
今朝の春友の縫ひたる干支の犬
新春やキャッチボールの子等の声

介護所のバザーのピザや福寿草
とびとびの土手の水仙風荒し
土手の日の窓いつばいや柿吊るす
剥落の仁王へ尖る冬の鳥
笹鳴や篠の中なる岬道
リュックより顔出す犬や初詣
境内の書展明るし今朝の春
初空へ蹴り上がりたり梯子乗り

大村 泰子

磯田なつえ

花村富美子

磯田なつえ報

樟ヶ谷句会

No. 149

H・30・1・25

斎藤真理子

土本かず子

下河辺美乃里

磯田 秀治

磯田なつえ

中村 たか

抱き上ぐる嬰の笑顔や冬日向
風花や我が身に刺さる風強し
絵本手に膝の嬰兒と日向ぼこ
母の香のきもの一式初句会
擦れ違ひ様指差さる赤き足袋
お年玉札の多きを喜こべり
初詣階多き女坂
二羽の鴨鯉の撒き餌に割込めり
早梅やみくじを伝ふ雨白し
びんづるの腰強く撫づ七日かな
びかびかの車並びし七日かな
どこからも誰も出て来ぬ寒さかな
松過ぎや目抜き通りの書店閉づ
縁側に大根切干香の甘し
師と囲む柚子の香れる山の膳
寒の空銀杏の乳の太く垂る

不河辺美乃里報

かんがるー句会

No. 113

H・30・1・11

老若の市民バンドやクリスマス

西川満寿美

寒風や解体すすむ一軒家

すっぽりと抱かるる赤子初詣
初髪をきりりと結ひて厨房へ

渡辺 公美

初景色車ばかりの狭き庭

仰向けの軒かく猫日向ぼこ

そろそろと夫のひきたる初神籤

小林 智子

福引へ夫と並べり人込みに

鼻歌の女子高生や初鏡

ワイパーよシヤリシヤリと霜搔き梳れ

杉山 美波

髪切りて風の抜け行く師走かな

顔揃ふ居間に雑煮の香の満てり

二日はや農夫の父のほろ酔ひに

水源の水細りたる寒の入

とんど火の消えて川原の冷えにはか

校庭に子等の喚声初氷

中村いく代

寒鰯の刺身横目にコップ酒

水漬をたらしながらや郵便夫

山成せる客間の布団干す四日

花アロエ潮錆色の屋敷神

磯田なつえ
小林智子報)

番町句会 No. 55

H・30・1・19

メロン提げ新客来たりお正月

子の描く紙いつぱいの聖樹かな

農機具の整備始むる冬日和

前田 恭子

玄関に一輪挿せり寒椿

関根 幸子

あたたかき冬の雨なり畑にも

茹で鍋の蓋持ち上ぐる松葉蟹

デパートの向かひに据うる社会鍋

池村 明子

門口の木椅子に媪日向ぼこ

寒椿お座敷街に美術館

御代りの声の大きや小豆粥

八木 洋子

搔き分けし株の奥より龍の玉

出番終へ寝入るアシカや冬日向

ふっふつと炊き上がりたり小豆粥

佐藤 ハル

もやもやと冬の川霧朝日出づ

山寺の跡を訪ねて冬山路

水鳥の潜りし跡の波紋かな

榎戸万里子

柚子風呂の袖が乳房に夜半の月

元日の願叶ふかな大き月

花枇杷や富士を離れぬ雲一つ

山住みの座敷に据うる大火鉢

磯田なつえ
山本 法子
前田恭子報)

向日葵句会

No. 28

H・30・1・10

裸木の並木に透けり夕茜

佐藤 博子

龍の玉子のポケットを藍に染む

房総を望む大山初詣

下河辺美乃里

初詣豆腐づくしの昼の膳

初富士を目交にして背を正す

立川まさ子

石走る川の流れや寒の晴

新幹線雪の田の中直走り

土本かず子

自販機の庇に小さき氷柱かな

初買や京の老舗の黒七味
うす紅の花の京菓子初点前
舩ひ船船霊さまに鏡餅
初日の出拝する我に日の直路

レモン俳句教室 No. 34

H・30
・1・9

橋本 紀子
坂本 操子
佐藤博子報)

小売店櫃に据うる豆火鉢

松永 和子

初島の海キラキラと石菫の花
独り居の友に絵葉書寒見舞

池村 明子

初笑齒の生え初めし子を膝に
真つ新なスケートリンク蹴り出せり

西川満寿美

凧揚げの園児富士山見ゆる土手
日を受けてゆらぎ出したり霜柱

前田 恭子

朝日差十一人の雑煮椀
夫の歩に合はず百段初日の出

八木 洋子

富山より届く豆餅かぶら漬
盛り塩を四方に始むどんと焼

斉藤真理子

食ひ初めの椀を選ぶや初社
葉牡丹の隙間に朝日届きけり

榎戸万里子

小寒や窓のハートに朝日入る
風花や杉の秀そろふ日影山

磯田なつえ

読み終へて夫婦見せ合ふ初神籤

◇兼題 「石菫の花」 雑煮」で作句。自選カレックスン

1月号権未知子)を読む (俳句) H29・1 前田恭子報)

静岡同人句会 No. 84

H・30
・1・6

初詣盲導犬に道開くる
野仏へ葉蘭に載せて年の餅
日の出づる刻若潮を汲みにけり
買初は暮に拾ひし猫の餌
すれ違ふ仕事始めの化粧の香
湧水の音まるやかに初日の出

富美子
法子
操子
たか
恵子
なつえ
法子報)

私の一句

立川まさ子

大富士の風にかがよふ芒原

まさ子

富士山こどもの国」は、平成十一年に静岡県が、大地と自然が遊びの素材として作った自然公園です。人の手で作られた遊具はありません。平成二十七年十一月、雄大な富士山のおもとの「こどもの国」に初めて行った時の感動の句です。一面に芝の生えているクロスカントリーコースを足どりも軽く約一時間かけて歩きました。秋晴れの清しい風に、太陽に耀く芒の原をこの世の浄土とも思いました。軽く汗をかき、充実した一日でした。本句は平成二十八年の新年大会の折、河原地英武副主宰の選に入り、一層想い出深い句となりました。

探梅行

多々良和世

洞慶院梅園 大寺の著き箒目梅固し なつえ

五六〇年の歴史ある宗洞宗の寺院。花期は二月下旬から三月上旬、四〇〇本の紅白梅蠟梅も楽しめる。この時期本堂で涅槃図の絵解きも聞ける。熊谷静石・愛子夫婦句碑がある。

静岡駅からバス藁科線羽鳥下車、徒歩二〇分

久能梅園 海光や梅の蕾に紅のぞく なつえ

久能山東照宮。一二五九段の表参道入口の脇にある梅園。実割梅、八房梅など一〇種類、二〇〇本が二月上旬から下旬にかけて咲く。駿河湾の海光が眩しい。苺狩もできる。

駅北からバス久能山下行き、徒歩一〇分

日本平梅園 春めくやくれなる色の今朝の富士 和世

日本平山頂。紅白梅、蠟梅など三〇〇本。中旬には梅まつりも。富士山、駿河湾の絶景が楽しめる。

静岡駅前からバス一―番線、日本平入り口下車

岩本山公園 ぞこからも大富士見えて梅探る なつえ

富士市の標高一九三 mの山頂にある公園。広大な地に紅梅、白梅が二月下旬から三月上旬まで咲く。四四種三八九本。大富士が間近に。上田五千石の句碑がどっかと座る。

JR富士駅から車で一五分

熱海梅園 晋平の小曲集や春うらら 晴美

明治一九年開園。日本一早咲きの梅、献上梅でも有名。一月下旬から早咲き、中咲き、遅咲きと五九種四七二本が順に開花。数々の童謡を生んだ中山晋平記念館が見学出来る。熱海駅から相の原行きバスにて一五分、梅園下車

「自選力を高めるために」—基本的なこと—

- ① 文字は正しいか? ・知っていると思っても辞書で確かめる
例 ×袖→○袖 (木に成る実である) ※禾偏は稲に関連する
×村度→○村度 (推察=心をつかうから巾偏である)
×丁字屋→○丁子屋 (香辛料・染料になる丁子に由来の店名)
- ② 旧仮名遣いに間違いはないか? (広辞苑) で確かめる
例 ×ゆずる→○ゆづる ※広辞苑の見方…カタカナが旧仮名
×かえる→○かへる くう [食う・喰う] クフ
×食う→○食ふ ゆずる [讓る] ユヅル
- ③ 動詞の活用形は正しいか? (広辞苑) で確かめる
例 ×隠る→○隠るる (上5下5が名詞のときは3段切れを避けるため連体形で繋げる)
×薄れる→○薄るる (薄れるは口語、文語は薄る、で下二)
※広辞苑の見方…かくれる [隠れる] 《自下一》文かく・る (下二)
文 _____ 線部分が文語である。
(下二) は れ・れ・る・るる・るれ・れよ と活用する
☆新年大会の投句より、スペースの都合で簡単に触れてみた。間違いがあると句の良し悪しの前に対象から外されることが多いので、辞書をひくことが大切であることを意識したい。

◇◇◇お知らせ◇◇◇
◎新年大会で一月一日現在の「二番茶会員名簿」を配布いたしました。
〒住所・電話番号など住居表示の変わられた方など、句会の幹事を
通して、書面でお知らせください。毎年年末に確かめているのですが、
なかなか徹底しません。

「一番茶」作品鑑賞 十一月号

山本 法子

急病と知らせの電話虎落笛

大石ひさを

真夜中の電話だろうか。こんな夜更けに何事かと、あわてて受話器を取る作者。耳に飛び込んできたのは……。不安な気持ちを虎落笛が追い打ちをかける句。

豊の秋野良着を脱ぎてフラダンス

谷津 政子

毎日野良仕事に追われている農婦にとつて、月に一〜二回のフラダンス教室は骨休めの楽しいひと時だろう。稲のよく実った喜びと、華やかなフラダンスの衣裳。颯やかに踊る姿が想像でき楽しい気持ちにさせられた句です。

猫膝に開く歳時記夜寒の灯

渡辺 公美

猫好きの公美さん。歳時記を見ようと座る膝に透かさず寄り寄る猫。よしよしと頬ずりし抱き寄せる公美さんの優しい姿が目につかぶ。夜寒の灯が効いている。

掻き分けて掻き分けて行く芒原

中村いく代

一面の芒原。その中を掻き分け進む作者。衣服に付くだろう芒の穂綿も何のその。掻き分けてを繰り返したところに楽しんでいる様子が表れている。

ケンケンパ釣瓶落しの路地の奥

榎戸真理子

子供達の小さい頃をおもいだした。道にチョークで○を描きケンケンパと、日暮れまで遊んでいたことを。危険の多い今、路地奥だからこんな遊びも出来るのですね。

※お詫びして訂正 一番茶十二月号8頁伊坂壽子さんの句 義元の御廟落慶秋日和は正しくは義元の御廟落慶秋日和でした。

☆・☆・☆・あとがき・☆・☆・☆

伊吹嶺」は今年から主宰が、栗田やすし先生から河原地英武先生に交代されました。スタッフも一新され新しい時代が始まります。一番茶句会報は来年の一月で六百号となります。磯田なつえ支部長を支えて、新しい同人の力をお借りし今後継続されますよう皆様と共に精進したいと思います。

新年会は、はとり句会の結束により楽しい有意義な会となりました。ありがとうございます。法子

○校正を中村たか同人に手伝っていただきました。

操子

平成30年「一番茶」句会一覧

句 会 名	開催週	開催場所	開催時間
もちの実	第3土曜	杓子庵（新聞）	13時
瀬名笹百合	第3月曜	瀬名中央町会館	13時30分
安西	第1日曜	番町市民活動センター	13時30分
はとり	第2金曜	花村富美子宅（羽鳥）	13時
樟ヶ谷	第4木曜	杓子庵（新聞）	13時
かんがる一	第2木曜	杓子庵（新聞）	13時30分
番町	第3金曜	番町市民活動センター	18時30分
向日葵	第2水曜	番町市民活動センター	13時30分
レモン俳句教室	第2火曜	番町市民活動センター	9時
同人	第1土曜	杓子庵（新聞）	13時

一番茶句会報 1月号（588）
 平成30年1月31日 発行
 発行責任者 磯田なつえ（☎054-278-7443）
 〒421-1201 静岡市葵区新聞458
 編集部 山本 法子（部長）
 操子・美乃里・博子・明子・和世
 印刷 番町市民活動センターにて印刷